

サイバーコミュニティへの期待

橋本信彦

日本大学大学院総合社会情報研究科

Expectation for a Cyber-community

HASHIMOTO Nobuhiko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Civilizing the city will increasingly become top priority in all countries-particularly in the developed countries such as Japan and the other. But neither government can provide the new network communities. And the key to the survival and health of the city is the development of the new network communities in the city. And human beings need community. Now we have to create new network community that never existed before instead of the old communities of history.

1 はじめに

インターネットによる諸活動が、専門的な職業に就いている人ばかりでなく、社会を構成する多くの平均的な人々にとっても当たり前となりつつある。いまインフラを含むネットワーク環境が整うことに伴い、数多くの団体が、最大限にそのネットワーク環境を利用し、物理的な地域性を持たない、新たな形態となるサイバーコミュニティ¹として、多分野に亘りそれぞれの活動団体として出現している。それらは生涯学習やサークルなどの余暇活動団体を含め、その多くが親密度の高い団体として認識され、またそのことが大きな特徴ともなっている。団体は、それぞれがその窓口として、活動の詳細についてそれぞれのネットワーク上におくホームページを大いに

利用するとともに、そのウェブサイト²にて活動をアピールする。それぞれがみな共通のテーマを持ち、共有する情報をもって組織としての運動を活発におこなっている。

団体を構成するメンバーは共有するテーマを持つ。それゆえお互いが感情的に近く、ときには全人格をもって接するなど、ある意味血縁に基づく家族に近い関係が築かれることもある。また企業や団体の公式ホームページ、あるいは個人のホームページと違い、このようなネットワーク上の団体においては、ホームページ上におかれる様々な掲示板等において、会員同士の活発な意見交換がおこなわれている。

さて我々が社会に参画するとき、そのための意識

¹ 「ある価値（目的やテーマ）に関心のある人々が集るネットワーク上の場所」である。『経営情報学会 2000 年春季大会』サイバーコミュニティを使った「ニーズ調査」の有効性に関する発表 根来龍之（文教大学）海老根智仁（株式会社オプト）P1 参考。

² 「ウェブページ」「ホームページ」などともいわれる。「ウェブ」は「ワールド・ワイド・ウェブ(WWW)」の「Web」(原語の意味は「クモの巣」)で巨大なネットワークであるインターネット網の「網」の部分を指している。「サイト」は「登録場所」のこと(ASCII24 > デジタル用語辞典) <http://yougo.asci24.com/> 2003/04/11。

条件としてはどのようなものが考えられるだろう。一昔前までは、地域社会への積極的な参画は必要条件であった。そこでは地域が、コミュニティが、公衆衛生から福祉、そして安全までをもその機能とした。しかし生活圏域の拡大や人々の生活の多様化にともない、それらの変化に伴って、新たに要請されるものを満足させるために多くの機能集団³が現われた。集団は行政能力を向上させ、その結果として末端レベルでの地域依存を減少させる。つまりこの過程は、わが国におけるコミュニティ衰退の一要因ともなっていたのである。

我々はすでに福祉を、安全を、そして衛生を身近な問題として地域コミュニティに求めなくともよい。わが国においては、それらは当たり前のように、国家レベルで充足されているからである。求めるのは快適でよりよい生活環境、あるいは充実した生きがいのもてる生活環境なのである。さらにコミュニティ衰退の他の要因でもある地域の拘束性⁴は、より自由な表現の場として、あるいはより快適な活動の場として、ネットワーク上の活動団体に人々を向かわせる。そこでは求められる快適性と、そして自由な参加が認められている。

コミュニティの現実も、さらにはその理論も、とうぜんのことダイナミックに変動する社会に合わせて定義されるべきであろう。常に現実を把握し、そのうえで理論の再構築を念頭に入れることが、社会状況に適應する諸事象の相関をもっとも助けることとなることはいうまでもない。とくに、現在進行中の社会変革には紐解くべき指針がないといわれる。それだけ社会の変化、つまりは社会意識の変化に適宜な指針が求められることとなろう。本稿は単なる未来コミュニティの予測ではない。現在進行中であ

³アソシエーション【association】

結社。共通の関心をもとに一定の目的を果すため人為的に作られた自律的な団体。学校・教会・会社・労働組合・協会など。『広辞苑 第五版 CD-ROM 版』2000

(EPWING 規約第 6 版準拠) 著作権者代表 = 財団法人新村出記念財団発行 = 株式会社 岩波書店。

⁴ 倉沢 進『コミュニティ論』放送大学教育振興会、1998 年、PP.49 ~ 52 参考。

る社会変化、いわゆる IT⁵によって、新しく発生しつつあるコミュニティの実相と問題点についての考察である。なお紙数制限の関係から、コミュニティの歴史的経緯やその概念については詳述を避け、必要があれば問題点ごとに振り返る程度にとどめたい。

2 日常化する情報環境

一般的な、コンピュータ機器を介したコミュニケーション環境においては、ネットワーク以外によるリアルなコミュニケーションおいての、つまりお互いが対面しておこなわれるコミュニケーションとは違って、そこに参加する者たちは変幻自在、容易に透明人間になることができる。つまり特徴的なことの一つとして、匿名性の増大をあげることができる。このような環境おいての人間関係は、一方的で部分的なものに偏る傾向がみられる。表現をかえれば、接触密度の薄い関係といった状態に徐々に変化をしていくといえる。

上述のように、ネットワーク上のコミュニケーションツールにおいては、人間関係の構築についてはわりあいにたやすくできあがると思われてきた。実際、それこそ短時間で簡単に出来上がることさえある。しかしながらそのことは、関係の崩壊もたやすいということにつながるのである。そのような環境をもとにしてできあがったネットコミュニティにおいては、出入りが自由であるがゆえに、帰属意識の薄さから、本来必要なコミュニティ成員としての自覚や義務をどこか遠くへやってしまうこととなる。近時大きな問題となりつつある反社会性の行動もここに起因するといえるだろう。

われわれの住む社会では、当然のこと、反社会的行為を放置することは許されることではない。反社会的行為はどこまで行っても反社会的であり決して正当化することはできないのである。なによりもその状態が続けば、IT 社会全体が非難され、ネットワーク環境そのものに対して、必要性の議論は押しや

⁵ 「情報技術」と直訳できるが、最近では「情報通信技術」とされることが多い。西垣 通[IT 革命]岩波新書、2001 年 5 月、PP1 ~ 5。参考。

られ、利用に対して規制その他の制限をかけられる要因ともなるであろう。ことの重要性を人々はどの程度理解しているのだろうか。

ネット環境はすでに、その利用で多くの人々が利益を享受している。またその環境はすでに社会生活に欠かせないものとなるほど、人々はそこに依存してもいる。後戻りは不可能といえるだろう。第一の問題はここにあると考える。つまり公共インフラとしての情報環境は、その利用による諸問題とは切り離すべきで、問題の遠因として、末端のネットワークにおける利用から発生する諸問題を、いかにもITによるネットワークそのものにその要因があるがごとく、声高に議論することの無意味さを理解すべきである。考えなければならないことは、与えられた環境をどのように利用し活用すべきかである。

3 コミュニティ問題の起点

まずここでいうコミュニティについて、簡単に定義をしてみたい。ここではコミュニティ概念の基本を、パーク⁶などシカゴ学派の都市コミュニティを対象にした定義づけではなく、古典的研究におけるマッキーバー⁷におきたい。その理由は、たとえば社会システム論からみた構造機能分析をネット上のコミュニティに対しておこなうとすれば、対象としての組織は少なくとも、ある程度固定的でなければ分析の対象とはなり得ない。特に現時点での、その急激な表出から、萌芽的であるとさえいえるネットワーク上のサイバーコミュニティにおいては、物理的空

間はおろか意味空間⁸としても不安定で流動的である。このような現状では、概念的にはマッキーバーの定義するように、枠を大まかに取り、コミュニティの要件としては、「地域性」および「コミュニティ感情」の範囲を条件とする程度にとどめるべきであると考えるからである。

さていわゆるゲマインシャフト⁹およびゲゼルシャフト的要素そのものは、一般にどのような社会にも含まれる。ゲマインシャフトにおいては、個人は主張を控え、ある意味匿名的であるとさえいえる。つまり社会全体に個が覆われ、庇護され、絆が強く情緒的であるが強く結合された社会である。一方ゲゼルシャフトでは、個人が目的志向をもって、多くは契約により結ばれている。それゆえシステムティックな社会に偏りがちになり、社会的絆はそれほど強くないと考えられる。しかしこの双方を止揚した社会環境が、もっとも理想的なコミュニティだとする単純な議論には簡単に賛成はできない。21世紀の社会システムは、想像以上に複雑に進化しているからである。

しかし、そうはいても、考えてみればわが国の地域社会が、全体としてゲマインシャフト的な要素を喪失していく過程は単純であった。それは皮肉にも、わが国の経済が発展成長する過程で表出してきたといえよう。以下は「地域社会における人間性の回復-コミュニティの必要性-」と題した第3次国民生活審議会¹⁰の答申である。

⁶ シカゴ学派の創始者R・E・パークは、コミュニティを生物学的生存競争段階と考え、そこからコミュニケーションを伴う闘争段階を経て、文化的レベルのソサエティに発展するとしている。

清水賢二・岩永雅也 『逸脱の社会学』放送大学教育振興会、1993年3月、PP.37～51。参考。

⁷ マッキーヴァーはコミュニティを基礎的社会としてとらえ、アソシエーション(派生的な集団)と区別・対比して論じている。対比して論じている。松本 久司 真の地域づくりとは何か 「日本型協同体の成立条件をめぐって」

<http://www.urban.meijo-u.ac.jp/zmatsumo/report/shinmachi.htm> 参考。

⁸ ここでは個人の認識行為と、認識行為によって造られた現実空間を「意味空間」としたい。橋本。

⁹ テンニースが設定した、ゲゼルシャフトと対をなす共同態型の社会型。共同社会とも訳す。成員が互いに感情的に融合し、全人格をもって結合する社会。血縁に基づく家族、地域に基づく村落、友愛に基づく都市など。社会構造の変化について、テンニースはゲマインシャフトからゲゼルシャフトへと進むと考えた。『広辞苑 第五版 CD-ROM 版』2000 (EPWING 規約第6版準拠) 著作権者代表 = 財団法人新村出版記念財団発行 = 株式会社、岩波書店。

¹⁰ 内閣府の第3次国民生活審議会(昭和43年11月30日～昭和45年11月29日)答申

「かつての共同体の拘束から解放された結果、生活の場における単位としては、個人と家庭が中心となり、他人にわずらわされない生活が重視されるようになった。しかし、人と人とのつながりが微弱な社会では、個人はだれにも拘束されない反面、孤立感が強まり、個人の力では処理できない問題が生じたときには、不安感、不満感や無力感が増大することとなる。

さらに、今後においては高度産業社会における緊張の多い非人間的な激しい競争と、ますます高まる技術革新にさらされる人々の人間性を回復する場に対する欲求は格段に大きなものとなるだろう。それは、個人と家庭のみでは受けとめることはできないものである。

ここに、各種の機能集団の役割がますます重要なものとなってくる要因がある。

しかしながら、人々の間の新しいつながりが必要であるとしても、それは人々の自主性を侵害するものであってはならない。また、かつての地域共同体にみられたような拘束性をそのまま持ち込むものであってはならない。人々はある時には孤独を愛し、他の時には集団への参加を求めるものであるから、このような要求に対応する開放性が必要である。このような観点から生活の場において、市民としての自主性と責任を自覚した個人および家庭を構成主体として、地域性と各種の共通目標をもった開放的でしかも構成員相互に信頼感のある集団をコミュニティと呼ぶならば、この新しい多様なコミュニティの形成こそ個人や家庭の段階では達成しえない地域住民のさまざまな欲求が充足される場となりうるであろう。」

ここで理解できるのは、国家の政策におけるところのコミュニティの重要性だけである。つまり地域単位としてまとめられたそれら集団が、その本来の役目としてのコミュニティよりも、国家管理としての有用性を基本に置かんばかりの姿勢が見え隠れする。本来の意味¹¹でのコミュニティの考察がなされ

ていない。個人が持つであろう多様な文化への希求、多様な哲学、異質なものへの不安、あるいは期待、つまり多様な文化や情報、さらには生活習慣までもを含め、一昔前までは容易に知ることができなかったそれら情報を、個人が簡単に、意識しなくても容易に得られることができる今日、そして情報の取捨選択が自由な現在、一元的な社会意識を人々に求めることは、全体主義国家ならともかく、その制度が正しく機能している民主主義国家においては、ふさわしいとはいえない。その意味での21世紀は、近代社会に終わりを告げともいえるだろう。

加えるに個人の意識の変遷は、その多くは社会の変化に忠実ではない。コミュニティへの理解もその一つであろう。たとえば宇宙飛行士が地球に思いを馳せるとき、そこでは明らかに地球を一つのコミュニティとみている。意味空間としては、青い海そして青い空。そこで暮す地球市民が、日常意識することさえしなかった、いやできなかったそれらを、暗黒の地で共有することの意識の芽生えを、そこに当てはめることができるのではないか。つまりコミュニティ意識には、その場その環境においての多様な側面があるということである。

牧歌的イメージにおけるコミュニティは、懐かしさや思い出の範囲にとどまらざるを得ない。繰り返すが今日の多様化した社会では、人々が求めるコミュニティのモデルは一元化できない。それらは自己充足的活動にその基本をおいたとしても、不安定で情緒的である。そこには今日の日本における、人々の社会参画意識の浮遊、つまり不安定状況が社会問題として底辺にある。

物理的空間を超えた、自由なコミュニケーションが可能なインターネットにおいては、従来のコミュニティ環境である新聞やテレビといった1対nのマス・コミュニケーションではなく、n対nで、しかもインタラクティブなコミュニケーション環境が与えられている。ではこれら先端技術による新しい環境によって、国家が、都市が、地域が20世紀において、その成長とともに希薄となったコミュニティーレベルでの市民同胞意識を補うと果して言えるだろ

¹¹ 西部邁 『国民の道徳』産経新聞社、2000年12

月、PP.635～637。参考。

うか。

問題を紐解く鍵として、アメリカの政治学者パットナム¹²の研究が注目されている。「ソーシャル・キャピタル」である。パットナムによると、「ソーシャル・キャピタル」とは、ネットワーク、規範、信頼などが持つ社会生活上の特徴を示すもので、直訳では「社会資本」となるが、道路・鉄道・橋などのような社会インフラとは違う「社会関係資本」を言う。

この社会関係資本「ソーシャル・キャピタル」が、地域のコミュニティを形作る市民がその必要とする最低限の繋がり、例えば各種クラブの等のネットワークによって、組織化された相互依存と市民的連帯の豊かなコミュニティを体現するとする。

現在の日本は、このソーシャル・キャピタルが減少しつつあるといえないだろうか。前述したとおりそこにいたる原因はそれほど複雑ではないといえる。しかし対策はそう簡単ではないだろう。「信頼」「規範」「ネットワーク」はそれぞれが違うフィールドにあるからである。異なる構成要素からなる「ソーシャル・キャピタル」そのものへの疑問も当然考えられる。

3 サイバーコミュニティの実相

ネット上では、掲示板やメーリングリスト等を利用した、ある特定の情報を共有する人々のコミュニティ¹³活動が多くみられる。その昔、特異な集団として見られていた情報技術者たちの、いわゆるオタク的な活動は、今ではその語源さえわからなくなり、語られることさえ少なくなっている。それだけネットワーク上の新しいコミュニティ空間では、共通の目的を持ち、共通の情報をやりとりする普通の人々が溢れているのである。

サイバー上に展開されているコミュニティは決し

て固定されず、たえず流動している。それはアメリカのように分裂し、拡大し、そして消滅する。もちろんサイバー空間には物理的な定員などはない。しかしながら人間の認知能力には限界がある。考えるに認知能力の限界が、サイバー空間におけるコミュニティの限界ではなからうか。つまり正しい比例率は提示できないが、集団の緊密度とサイバー空間におけるコミュニティ規模は反比例するように思える。そこにおける緊密度の基準は、構成員間でおこなわれるコミュニケーションの多寡であろう。

それら共通の目的が限定され細分化されればされるほど、その構成員間の緊密度は増し、構成員間の活動は活発となる。つまりコミュニティ構成員が共有する目的や関心事項の限定は、細かな単位になるほど緊密度を増すことにつながる。

構成員の発する情報は、その多くは受信者によって特定された個人の意味作用を持つ情報として加工される。緊密度の高いサイバーコミュニティ空間といえどもそれは変わらない。むしろインタラクティブ¹⁴な空間であればあるほど個性的な加工がされる。それは1対nの一方向的なコミュニティで発せられた情報が、その多くが一定方向に、その情報の意味作用を誘導することへの期待を含むことを考えると理解できるだろう。

個人は情報を合理的な選択をしたうえで、さらにそこにある価値、知識、そして可能性を判断する。情報の判断量が多ければ多いほど作業は相関し複雑となる。広大な情報過多の社会においては、いかにルーティンな作業といえども簡単ではない。しかし情報過多に発する諸問題は、細分化された専門的な集団においてはある程度軽減できるといえるだろう。なぜなら知識を会得するためのパターンが単純化され習慣化されるからである。とはいえ行動のパターン化は価値規範の固定につながる危険がある。せっかく人々が自由なサイバー空間で持つことができた

¹² アメリカの政治学者。

¹³ ここで説明するコミュニティは企業や団体のもとで展開されるネット上のコミュニティではなく、共通の目的を持ちn対nの関係で構成される集団に限定する。倉沢 進『コミュニティ論』放送大学教育振興会、1998年 PP、11～18。参考。

¹⁴ 相互に関係し合うとか、「双方向の」意味である。ここではインターネットの双方向性の利用をいう。『現代用語の基礎知識』(CD-ROM)版(C)発行所=株式会社 自由国民社「現代用語の基礎知識 2000年版」準拠。

コミュニティには、固定された基準や規範は似合わない。

しかしながら多くのサイバー空間に浮遊するコミュニティなるものは、活動が活発になればなるほど集団に習慣化された行動パターンがみられてくる。自由な環境ほど基準に依拠する期待も大きい。なぜならば個人の資質は知識の量ではなく環境で作られるからである。つまり集団には、無法を喜ぶものが一人もいないとはいえないのである。活動に歴史が加わり、経年と同時に期待する集団内での行為基準が出来上がると、それらは価値規範となり、結果として構成員の行為を拘束することとなる。自由なコミュニティも、結局は堂々巡りを繰り返しているだけにすぎないのだろうか。

結論を出す前に、ネット上で展開されているいくつかの現象を考えてみたい。まず、それぞれが違う目的を持つ専門化されたコミュニティにおいても、サイバーコミュニティと呼ばれる集団には、以下¹⁵のように共通な価値観を見出すことができる。

- 1 文化や伝統といった異質の価値観を許容する。
- 2 活動空間が自由である。
- 3 組織形態がヒエラルキーにならない。
- 4 同じ組織内においても問題ごとに組織を再形成できる。
- 5 広義のフェミニズム¹⁶を志向する。
- 6 自然との共生を考えエコロジーな生活を目指す。

たとえば上記の2・3・4などは、市民運動の中にその特質が多うかがわれる。また、1・5・6などは巨大組織となる前のNPOや国際協力団体にその特質をみいだせるであろう。これらはいわゆるソサエティとしての個々の社会の中であって、集団が

¹⁵ - 21世紀の課題と基本方向（静岡県総合計画審議会 平成13年3月答申）。参考。

¹⁶ ここでは、近代化や社会の洗練による、言われなき社会的差別を排除するという意味で用いる。橋本。

それぞれの個性を発展させ、自立し、恒常的組織のマイナスを排除するための共通の価値観と言えよう。個々の専門的な目的とは別に、その志向性における共通性である。そこには、たとえどのような社会形態であろうとも、コミュニティは、個の自立と自覚に基づくものであったほしいという願いが底流をなす。もちろん自立的コミュニティといっても閉鎖的では困る。コミュニティの個性を大事にすることと鎖国は、別のものであろう。今日の社会では、個性的なコミュニティを認めても、閉鎖的なそれは成立し得ないほど相互に複雑に相関しあっている。

科学理論は事実から生まれると言われている。しかしそれには事実の積み重ね、いや事実在先立つ「何か」による仮説が必要条件であろう。仮説は事実であるデータによって検証される。そのうえで理論は成立するのである。ネットワーク上のサイバーコミュニティは、今まさに事実を積み重ねんとしている。ここに理論の枠組みを当てはめる試みをなさんとするのは、自由で、しかも学問枠を取り外した概念枠を基本に持つべきである。その上で考察されなければならない。今進行中のこの実験結果は、そう遠くない将来に理論化されるだろう。混沌もまた事実である。

4 おわりに

人々が、まるで砂漠でオアシスを見つけたごとく、このサイバーコミュニティに集うのはなぜであろう。何か特別の理由があるのではないだろうか。

突然だが人間の脳における知識量ストックのキャパシティはかなりのものであると聞く。ではその穴を埋めるがごとく知識の山を求め、そこへ群がるのであろうか。答えは否であろう。我々は一方的に与えられる情報を、その生活の基本においていた社会には、とうに見切りをつけ始めている。求めるのは情報のみ、集うのは、そこには我々が独自で、個人単位で、それぞれに応じた知識を作るため、そのための情報があるからである。

では我々が作る知識は、どのように社会関連の基本となりえるのだろうか。また、その知識の概念は、その知識の定義はどのように捉えられるべきである

うか。古来知識というものは「主体」の観念として捉えられてきた。そしてその主体のみが知識も権力も持ちえた。すなわち社会秩序は、それら主体間の相関で生まれると考えられていたのである。

N.ルーマン¹⁷は、コミュニケーションを社会システムの要素として考えた。そこでは、知識そのものは主体の知的営為からではなく、人々が対象についてコミュニケーションする中から生まれてくるとしている。他の理論との違いは、社会秩序形成のもとになる知識が究極的にはどこから発生するのかという問題に関係する。注意しなければいけないのは、我々人間がコミュニケーションの主体ではないということである。主体はコミュニケーションそのものである。我々人間は行為を通してコミュニケーションがコミュニケーションするのを手伝う。少し遠回りな論述となったことは反省するが、**3 サイバーコミュニティの実相**において紹介した、サイバーコミュニティの特色ともいえる共通の価値観を見直していただきたい。そのどれもが、もし、我々人間がコミュニケーションする主体となったならば、主体として価値や基準を強調したら、集団そのものの末路は明らかである。残念なことに、多くのサイバー上に発生したコミュニティの発生から消滅のまでの軌跡をたどれば、原因がそこにあることが理解できるだろう。

社会全体を括るような権利主体は正統化されないものである。限られた主体が持つ全体的な権利や知識は停滞し衰退する。21世紀の現在でも、一部の国家では超越的な個人主体の存在が認められる。ここでは特定の個人主体の唱える知識が社会全体の意味連関を形成している。そしてそのような社会がどれだけ悲惨かも我々は情報として入手できる。

サイバー上のコミュニティは、経験や学習を通して得られた諸活動についての、理想のかたちを実践するためのコンテクストとしてはその役割を十分に果たすだろう。ただしどのように活用できるかは

我々自信にかかっている。確立された、もしくは伝統的な制度・価値・思想に対して我々は常にオルタナティブな姿勢が必要である。

さてこの研究をとおしていくつかの課題が表出してきた。ひとつはサイバー上の集団についてである。集団には主体が必要であろうか。だとすればその主体はどの程度主体であるべきか、社会の成熟と主体の相関は、許容される主体構造は。これらはサイバーコミュニティへの参画条件をも含めて考察しなければならない。次にどうしてもかかわってくることで規範がある。ネットワークは、その創成期までもを含めれば、20年以上にわたって形成されてきたといえるだろう。そこにはすでに独特の文化や共通合意がある。さらに、そこではいわゆる現実のリアルな社会とは違う、表現を変えれば相容れない文化もある。こうした中、ネットワークにも最低限の規範は必要なのか、そうだとしたらその独自で自由な環境を壊さない範囲での規範とはどのようなものになるのか。情報活用の末端では既に多くの法律や判例がでていますが、全体にわたる研究は少ない。今後上記の問題を含む検証を進め、指針となる論考を提示したい。

参考文献、資料

- 1 情報文化学会論文誌 VOL.9 NO.1 PP.28 ~ 35 (2002)。
- 2 Howard Rheingold / 会津泉訳『バーチャルコミュニティ』三田出版会、1995年。
- 3 池田謙一『ネットワーキングコミュニティ』東京大学出版会、1997年。
- 4 倉沢進『コミュニティ論=地域社会と住民生活=』(財)放送大学教育振興会、1998年。
- 5 清水賢二 岩永雅也『逸脱の社会学』放送大学教育振興会、1993年。
- 6 牧野二郎『市民力としてのインターネット』岩波書店、1998年。
- 7 奥野卓司『第三の社会』岩波書店、2001年。
- 8 Information Network Low Review VOL.1.1(2003) PP51 ~ 71。
- 9 ゲオルク・クニール、アルミン・ナヒセ『ルー

¹⁷ ニコラス・ルーマン社会学者、行政官をへて学究生活に。主著に社会システム理論がある。ゲオルク・クニール、アルミン・ナヒセ著『ルーマン社会システム理論』新泉社、1995年12月、PP8 ~ 18。参考。

- マン社会システム理論』新泉社 1995年。
- 10 吉見俊哉『メディア時代の文化社会学』新曜社
1994年。
- 11 ルーマン『信頼』頸草書房、大庭 健・正村俊
之訳、1990年。
- 12 西部邁『国民の道德』産経新聞社、2001年。
- 13 哲学する民主主義 伝統と改革の市民的構
造 叢書「世界認識の最前線」
ロバート・D. パットナム (Author), Robert D.
Putnam (Original Name), 河田 潤 一
(Translator)
- Web1 「CANフォーラム・ニュースレター」創刊号
(1998年1月号)原稿。
<http://www.midori.com/yamada/yamada9801.html>
2003/4/02
- Web2 世田谷ネット <http://www.setagaya.net/>
2003/4/04
- (Received:June 16,2003)
(Issued in internet Edition:July 07,2003)